視角

子どもに「寄り添う」とは？

杉浦真紀子

この表題の言葉から、まず思い浮かんだのは、緊張と不安に満ちた子どもたちをまるごと受け止めようと模索する、入園当初の情景である。

保育初日。保育室にやって来る子どもと目線の高さを同じにして、「おはようございます」と、子どもたちを受け入れる。お母さんと一緒に「おはようございます」と言う人、にこっとほほ笑むだけの人、と反応はさまざまだが、中でもK子の反応は特別だった。私が「おはようございます」と言いながら近づいていくと、「ちがうの！」と怒ったような口調でそっぽを向いてしまう。（「おはようございます」は違ったのね……）。そこで、何かつながる糸口はないものかと、K子を遠巻きに観察。どうやらピンク色とプリキュアとお姫さまが好きらしいとわかる。

翌日、ピンク色のワンピースを着てきたので、今度は後方から近づいていって、「そのワンピース、素敵ね！」と声を掛けてみる。すると、何も言わないけれど、振り返って私の顔をじっと見つめるK子。（少し手ごたえがあったかしら？）

また数日後、今度はあまり構えずに「おはようございます」と声を掛けてみる。返事はないが、何か言いたげな表情で、朝の支度を済ませていくK子。その時、K子のお母さんが「すみません。でも、門の所では『まきこせんせい、来てるかなあ？』って言ってたんですよ」と、申し訳なさそうに話してくださった。（そうだったんだ……）。「K子ちゃんなりの挨拶をしていますから、いいんですよ」。

さらに数日後、いつも「おはようございます」と抱き付いてくるU子と登園が重なった。U子はいつ

もどおりに私に抱き付いてきた。その次の瞬間、「おはようございます」と、両腕を広げて私の胸に飛び込んできたK子。U子の動きが後押しをしてくれたのだろう。抱き止めたK子の体はまだまだ硬かったけれど、心が柔らかになっていくのが感じられた瞬間だった。

入園当初の、目の前の子どもとつながりたい一心、それはまさに「寄り添う」心なのだと思う。

こんな寄り添い方もある。

昨年受け持ったK男。年少の時には母親となかなか離れられずに泣く姿が、年中の時には、仲良くなった友達と群れ、相手が離れそうになると力ずくで引き留める姿が、遠くからではあったが目に入ってきていた。そしていよいよ担任として、年長になったK男に出会った。

四月、進級した喜びとともに、クラスや担任が変わったことへの不安も抱いていたK男は、昨年と同様、仲良しの友達と群れていた。友達に対して強気な言動が目立ったが、相手もそれを受け入れ、お互いに肩を寄せ合うようにして過ごしていた。

五月、狭い園舎内を駆け回ったり、力の加減をせずに戦いごっこをしたりと、なかなか遊びに展開が見られず、エネルギーを持て余している様子が伝わってきた。K男の思いを聞きたくて、率直に「本当は何がしたいの?」と問いかけてみると、「ドロケイをしたいけど、誰もやってくれない」とすぐに答えが返ってきた。本当はドロケイをやってみたいと思っていること、しかし友達に誘いを断られて自信をなくしていることがうかがい知れた。そこで、まずは「相手にも（K男とは違う）思いがあること」を伝え、その上で「自分から他の友達を誘ってドロケイを始めてみること」を提案した。しかし、「やっぱり、ドロケイなんてしたくなかった」と、そのことに向き合えずにいるK男。ここで一歩踏み出してほしいとの思いから、繰り返し説得し、励まし続けた。

やがて数日後、「わかったよ」と言いながら「ドロケイやる人、この指とまれ！」と、クラスに向けて発信するK男の姿があった。これをきっかけに、いつもとは違う友達とのかかわりが増えていった。さらに、K男は自ら登園を早め、「ドロケイやろう！」と、園庭で友達を待ち受けるようになっていった。

九月、運動会を翌月に控え、昨年の年長児が行っていたリレーを自分たちもやってみたい、ということが話題に上るようになった。K男がにわかに動きだす。まさにドロケイでの経験が生き、「リレーやる人、この指とまれ！」と自ら仲間を募っている。集まったメンバーを二チームに分け、トップとアンカーを決め……と、最初は順調だった。しかし、しばらくすると、「リレーなんか面白くない。や～めた！」と立ち去ってしまうのだ。しばらく同じような状況が続く中で、ある日、K男を呼び止めて話を聞いてみると「おれが始めたリレーなのに、誰もおれの話を聞いてくれない」とのこと。人数が増えてまとめきれなくなったこと、周りがそれぞれに自分の意見を主張し始めたこと、勝ちにこだわりたいこと等、いろんな葛藤がうかがえた。しかしK男には、自分の思いだけでなく、相手の思いにも耳を傾けて、仲間と共に遊びを進めていけるようになってほしいと願い、K男が立ち去ろうとするたびに引き留め、お互いに思いを言い合えるよう、必要な時には言葉を添えていった。

やがてK男は、話し合いの場面で言葉に詰まるたびに泣くようになった。それは普段強がっているK男が、みんなの前で弱い一面をさらけ出した瞬間であった。思いがうまく言葉にできなくても、その場に踏み留まるようになったことで、K男の思いが伝わっていったように思う。こうして、いつもリレーにかかわっているK男の姿を、周囲の人たちもしっかりと受け止めていたようで、「アンカーはK男がいいと思う」という言葉がいつしか聞こえるようになり、その後押しがK男にとっての自信となっていっ

た。

一月、このころのK男はだいぶ自信がついてきて、主張の強いメンバーと共に、自分たちに有利なルールで遊びを進めようとする姿が目立っていた。それに対して不満を抱く人たちも増えていったが、K男たちは一向に取り合う気配がない。K男を含めたメンバーに、周りの人の気持ちに気付いてほしいと願い、ある日、あえて別の場所で女の子と保育者とでドロケイを始めてみることにした。単純で公平なルールの中で、焦ることもなくズルをする人もいない、心から楽しめるドロケイ！　その雰囲気が伝わったのか、先にやっていたK男たちのドロケイは自然消滅……。しばらくすると、K男が気まずそうにやって来て、「……入れて」。女の子たちは「ズルしないなら入れてあげる！」と、K男をあっさりと受け入れた。その日、帰り支度をしていたK男が「今日のドロケイ楽しかったなあ」とつぶやいたので、「K男たちのドロケイは？」と問い返すと、「みんなズルするから……」。自信がもてるようになったK男だったが、新たな人間関係の中で、さらに自分を優位に立たせたい、そんな焦りと余裕のなさがうかがえた。

翌日、「先生、一緒にドロケイしよう！　あ、やっぱりここで見てて！」とK男。保育者に見守られながらではあるけれど、自分だけでなく、みんなも楽しいと思えるドロケイを始めてみよう……そんな決意を抱いてまた一歩踏み出したように感じられた。

このようにK男に対しては、疑問を投げかけたり、励ましたり、また、背中を押したり、見守ったりと、かなり踏み込んでかかわってきたことを改めて感じる。それは、育ちゆく子どもへの信頼と期待があるからこその、率直な願いであり、かかわりである。目の前の子どもの育ちをとらえ、願いをもってかかわる保育者の姿勢、それが子どもに「寄り添う」ということなのだと思う。

（駒場幼稚園）